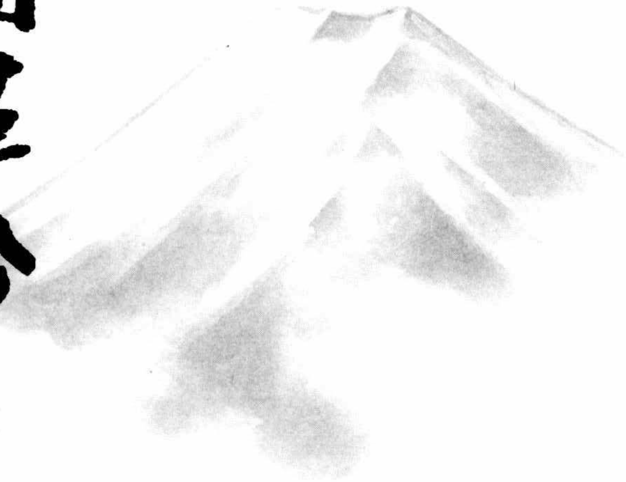
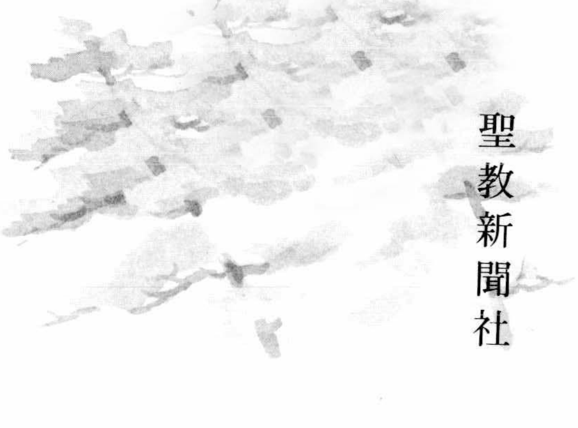
人間革命

人間革命

第二巻



池田大作



聖教新聞社

人間革命

第二巻

昭和41年4月15日　発行
昭和48年4月10日　第34刷　　定価420円

著者© 池田大作
発行者 美坂房洋

発行所 郵便番号 160
東京都新宿区信濃町18
電話 東京(353)6111
聖教新聞社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

印刷 明和印刷株式会社
製本 株式会社 星共社

1973 Printed in Japan

目次

幾山河 3
序曲 57
光と影 100
前哨戦 152
地湧 209
車軸 274
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間革命

第二巻

装画　川端龍子

挿画　三芳悌吉

幾山河

九月下旬――

北関東の山々は、すでに、秋たけなわである。

農家の庭の柿は、鮮やかに真っ赤に、熟していた。

路傍には、さまざまな秋草が咲き薫り、その中に、紫色の野菊が、静かに咲いていた。月見草も、咲き残っている。芒の穂も、秋の到来を告げている。

戸田城聖ら一行七人は、朝早く、栃木県那須郡の黒羽町をたって、両郷村に向かっていた。黒羽町から那珂川の上流に沿った旧陸羽街道は、那須高原を経て、福島県白河へと続いているのであろう。

一行は、街道を右にそれて、山路に入った。傾斜は緩やかだが、石ころの多い、いかにも高原らしい田舎道である。

那須高原に近い、この地方は、右にも、左にも、山々の峰が重なっている。

北方は、那須火山系の山脈が続く。その中央は、茶臼岳の活火山だ。その火口とみられる峰からは、白い煙がかすかにのぼっていた。

空は澄んでいた。

山脈の陰影も、濃淡をあらわしている。黄ばみかけた、森の梢も点々とみられた。

山は、急ぎ足で、秋の半ばを送り、今、山容を変えようとしているのであろうか。

静かだ――平和だ。

彼は、心に思い浮かべた。杜甫の「春望」の詩である。

――国破レテ山河アリ。城春ニシテ草木深シ。時ニ感ジテ花ニモ涙ヲ濺ギ、別レヲ恨ミテ鳥ニモ心ヲ驚カス……

ここは城ではない。春でもない。いまは秋だが、草木深しとは、たしかに実感であった。

この平和の地に、戦争の余燼はない。あるのは唯、食糧を欲し、金銭を追って売買に余念のない人間のみである。

だが、一行は、しきりに空を仰ぎ、山を眺め、喜々としていた。遠近の風物を、右に左に、目を馳せながら歩いていた。

真っ赤な葉鶏頭、大輪のダリヤ、丈高くのびたエゾ菊——焼野原の東京人の目には、絵よりも美しく感じたのであろう。

いつか谷間はせまり、視界は狭くなってきた。遠い山々の峰は、近くの前山に隠れてしまった。すると、柿の実や、イガをつけた栗の実が、目にはいってきた。都会育ちのある者は、栗だ、柿だと、大発見をしたように、指をさし、子供のようにはしゃいでいる。

戸田城聖の表情は、国破れた日本の山河に、やがて永久の平和を築くために、力強く、今歩んでいるという自負心に輝いていた。

八キロの山路は、単調で長く感じられた。

「ずいぶん遠いな。まだか？」

戸田城聖は、小西武雄に呼びかけた。

「いや、もうすぐです」

先頭に立った小西は、ふりむきながら言った。

「さっきから、もうすぐ、もうすぐといって、ちっとも、すぐじゃないじゃないの」

清原かつは、小西に向かってかみついた。皆も、そうだ、そうだ、と口を揃えて攻撃した。

戸田は、弟子達の騒ぎを、度の強い眼鏡越しにいつも慈眼を向けて、楽しそうにみているので

あった。
彼は、笑いながら言った。
「小西君のもうすぐ……は、われわれと、距離の単位がちがうようだな。道を間違えたんじゃないだろうな。おいおい、大丈夫かい」
小西は、真面目くさって答えた。
「先生、まさか。ここは一本道ですよ。大丈夫です。本当に、もうすぐです」
「本当か？」
一行は、どっと笑った。
賑やかな笑い声は、谷間の静寂を破って、透明な秋空に消えていった。
戸田城聖は、夏服を着ていた。洋服の襟から、真っ白い開襟シャツがのぞいていた。そして、鳥打ち帽子を、ちょこんと頭にのせていた。
長身の彼の周囲には、六人の男女が先になり、後になり、一団となって、坂道を登っていった。
彼等は、それぞれ、チグハグな服装をしていた。
よれよれのスフの国民服の者もいる。ある者は、色あせた不恰好な黒の背広に、黄色い将校ズ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ボンをはいていた。

中年の女性は、モンペに、主人の背広を着て、長い袖の先から、指先をのぞかせたりしていた。まるで、仮装行列である。

戦後の衣料の窮乏のため、服装など全くかまっていられなかったのであろう。

人は窮乏にありと、驚くほど強靭な力を発揮する。反対に、極端に弱くなり、意気地のなくなる人もある。

だが、いかなる逆境に遭遇しても、毅然として責任を持ち、一家一族を、また、一国を立派に率いていく金剛不壊の色心を、会得したいものである。

村人達は、この一行を、買い出し部隊と思って、眺めていた。また、不思議にも思った。

彼等は、誰一人としてリュックサックを背負っていない。買い出し部隊特有の消沈した顔、暗い影、焦りの眼もみられない。いや、あまりにも明るい、生き生きとして活気に満ちた動作である。この一団には、近年、戦前、戦後を通じて見られぬ明朗な雰囲気があった。時折りの哄笑、爆笑に、村人までが楽しくなるほどであった。

村人達は、異様な眼差しで、一行を見送っていた。

「さあ、いよいよ村に入った。ほれ、これを見ろ」

小西武雄は、一本の電柱を指して大声で言った。そこには、粗末な紙に、墨で黒々と書かれたビラが貼ってあった。

一行は、すぐに電柱に近づき、顔を寄せた。

――戸田城聖氏来る。法華経大講演会。九月二十二日午後二時、両郷小学校にて

「やってるな、やってるな」

原山幸一は、じっとビラを見ながら言った。人柄のいい彼は、喜びの中に、同志の奮闘に心からの祝福を送ったのである。

「増田さん一家も、たいしたものね。戦後、地方で先駆をきって折伏に起ったんだもの。皆、うんと応援してあげようじゃない……」

清原かつの口調にも、妙法の使徒に対して、何としても激励したい気持ちがあふれていた。

戸田は、カラカラと笑った。そして、ビラを見ながら屈託ない声で言った。

「戸田城聖などと言ったって、誰も知るまい。いったい、どんな男かと思って、ノコノコと大勢やって来るといいんだがなあ」

暫く行くと、またビラがあった。その度に、一行の足の運びは、次第に早く、軽くなっていった。

「先生、ここです、増田さんの家は……」

小西は、路に沿った一軒の農家を、指して言った。

「やれやれ、来たか。小西君のもうすぐです——には、今日は参ったな」

「八キロの道じゃないぞ、十キロ以上はたしかにあったな」

皆は、軽口をたたきながら、裏に回り、南側の中庭へ出た。

人声を聞きつけた増田一家の人達は、さっと飛び出して来た。待っていたのである。

その顔は、喜色を一面にたたえて明るかった。

増田久一郎は、元警察官であり、牧口門下の学会員で、大森に住んでいた。

戦時中退職して、ある会社に籍をおいていた。戦況が不利になってきた十九年五月に、郷里の両郷村に買い求めた家へ、家族全員を疎開させたのである。

妻と娘二人と姉娘の婿との四人である。婿は、鍬を手にしていた。娘二人は、東京でも教員をしていたので、この村の小学校に職を得ていた。

久一郎も、戦後は東京を去り、郷里で一緒に暮らすようになった。国破れ、年老いてみれば、

農業に専念する道しかなかったからである。

田六反、畠四反、計一町歩の未経験の自作農一家である。六十歳を越えた久一郎を先頭にした労働である。その上、肥料すらない。近所の農家の人々は、ただ嘲笑するばかりであった。

慣れない農作業は、実に辛かった。勝手も違う。しかし、彼等には、東京から奉持した御本尊があった。慌しく変動する時代に、しかも生活様式が大変化する人生航路に立ち、ただ一筋に、御本尊に一切を願わずにはいられなかった。

増田一家は、那須山中で、一粒種の強盛な信者であった。

七月以来は、旱天続きである。雨が欲しい。豊作にしたい。必死であった。

老いの一徹の久一郎は、全魂を打ち込んで、家でも野良でも唱題し続けた。湿れる木より、火を出す如くに――。渇ける砂地より、水を出す如くに――。

近くの村民は、彼の姿を見て、あの爺さん、とうとう頭が狂ったかなどと嘲り笑った。

だが彼の祈りが通じたのか、やがて不思議にも、篠つく雨が降ってきた。

彼等一家の真剣な仕事ぶりと、純粋な信仰を続ける姿には、村人の好奇の眼も、いつか畏敬の眼に変わっていた。

一家の折伏活動は、歓喜のうちに、自然と始まっていた。

法は、人によって尊く、燦然と輝きを増す。半面、人によって、法を下げてしまい、折角求めている人まで、遠ざけてしまう場合がある。信仰者の道理にかなった実践と、実証とが実に大事といえよう。

妙法自体は、厳然と、永久に変化はないが、その法の尊さの証明は、信仰者の一念が法にかなうか否かによって決定してしまうのだ。

東京の学会本部では、地方指導の日程を決定した。

九月二十一日の土曜日から、二十二日の日曜日、二十三日の秋分の日の三日間である。

場所は、栃木県の両郷村と、群馬県の桐生市に、指導の手をのばすことになった。

桐生にも、数名の疎開した学会員がいる。彼等は同地の日蓮正宗檀信徒と共に、座談会を開催し、折伏活動が活発化していた。

敗戦茲に一年――昭和二十一年秋のことである。

初代会長牧口常三郎が、静岡県下田の指導中に逮捕された十八年七月から、満三年余の月日が経過していた。

今、学会の再起も、戦後最初の地方指導を敢行する段階にまで、発展していたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com